

## 豪州労働党首相 R. ホーク (1983-1991) の人物像に迫る I

—— 生い立ちから豪州労働組合評議会の代弁者時代まで (1929-1960) ——

阿部 雅俊

### An Attempted Portrait of the Australian Prime Minister R. Hawke, (Part I) : From His Birth to Advocacy of the Australian Council of Trade Unions (1929-1960)

Masatoshi ABE

#### はじめに

本稿は1980年代に首相の座にあって、豪州の「労働党の黄金時代」を築き上げたロバート・ホークの人物像を捉えることを目指したものである。ホークの伝記やホーク自身の回想録をはじめとしてホーク政権の功績を評価した様々な書物がすでに現れているが、ホークが政界から引退して十年近く経った今という歴史の時点で、ホークの功績をより客観的に評価を下すことが容易になっているといえよう。

その意味からも、もう一度ホークの業績の評価のために、ホークの人物像に迫り、ホークの生い立ちから政界から引退するまでの月日を追ったものである。紙面の制限のために、本稿ではホークの人物像 I として、生い立ちから社会人として成長していくまでのホークの日々を追った。

#### 1. 生い立ち (1929年 - 1945年)

豪州の労働党政権の首相の座に、1983年3月から1991年12月まで君臨したロバート・ジェームス・リー・ホーク -Robert James Lee Hawke- は、世界大恐慌の波が豪州に間近に迫った1929年12月9日に、南オーストラリア州のボーダータウン -Bordertown- という小さな町で、牧師の父と宗教心の極めて厚い母との間に次男として誕生した。

ホークが生まれた環境は、20世紀というよりは19世紀に属するといった方がふさわしいような地方そして家族であった。彼の父親のクレム -Clem- と母親のエリー -Ellie- の双方の祖父母は、いずれも英国のコーンウォールに生まれ、19世紀の半ばに南オーストラリアの銅鉱山のある地域に移住してきた。クレムとエリーはともにメソジスト派の信者として育てられた。クレムの家は貧しく、クレムが学校に行ったのは12歳までで、それ以後はミルク配達、鍛冶屋見習いなどをして働いた。クレムの父 -ホークの祖父- は労働党支持者として活躍し、クレム自身も労働党員となり、政治活動に入ることを夢みていたこともあるが、彼の夢は息子に託すことにして、牧師になることを志した。息子は見事に父の夢を達成することになったわけである。

他方、ホークの母親のエリーの実家は富裕な地主で、政治的には保守的であった。エリーは教育については異常なほどの熱意を持ち、教育により人間は神から与えられた能力を完全に発揮できるようにすべきだ、という宗教的ともいえる強い信念を持っていた。エリーは師範学校を卒業している。クレムとエリーの二人は1920年に結婚し、結婚後二人は女性の聖職者就任を認めるなど社会的平等をかかげて進歩的で、また最も教条的でないとされる教会、会衆派教会 -Congregational Church- に属し、クレムは同協会の牧師として働くことになる。同教会の

教条は政治的には人間皆兄弟という労働党の理想に最も近いとされていた<sup>1)</sup>。

ホークの兄のニール -Neil- はホークより九歳年上で、厳しく育てられたのに対して、ホークは甘やかされて育てられた。ニールは聡明で、教育の重要性を信じる母親の期待に応えるべく、ホークが3歳の時にアデレードにある寄宿舎つきの学校に送られたために、ホークはそれ以後家庭ではあたかも一人息子のように育てられた。ホークのごく小さい頃の父クレムへの記憶は、「すべてが愛、しかも圧倒的な愛だった。父が私をいかに熱烈に愛したか、言うべき言葉を知らない。私はまさしくパパの子だった」と述べている<sup>2)</sup>。さらにホークは「子どものとき、私は友達がほとんどいなかった。パパがいれば十分で、他には誰も要らなかった」とも記している<sup>3)</sup>。父と子の関係は余りにも親密で、母のエリーは二人が相互に依存しすぎることを憂慮したほどだった。

しかしホークの人生により大きな影響を与えたのは父親でなく、母親のエリーであった。次のようなエピソードが残っている。少女時代の誓いを守って聖書を読むことを日課とする信仰心の厚いエリーが、聖書を手にするたびになんとなく開けた頁が、ハイドンの名曲「メサイア」などにも引用されたイザヤ書の第一章の一節「……息子が私たちに与えられ、その息子の双肩に政府がかかる……」 -Unto us a son is given. Upon his shoulder is government- が記された頁であったとされる。その出来事と言葉を母親は神からの啓示として受けとめて、堅く信じこみ、それが実現されることを待ち望んでいるのだ、と幼年のホークに母親は話している。こうして信心深い母親は、ホークが「神から遣わされたもの」と堅く信じ、教育者でもある母親は、ホークに勤勉の大切さを教え、ホークは「神から授かった頭脳」を使うことを幼いときから絶えず強いられ、その授かった才能を駆使しないことは罪にあたると諭されていた<sup>4)</sup>。

**幼・少年期：** ホークの生まれた農村の町、ボーダータウン、へも大恐慌の波が1931年頃から押し寄せていた。ホークの幼少の友達は農家の子供たちで、小麦や卵といった農産物の値下による農民の所得の低下で、農村の子供たちがいかに苦しい生活を強いられているかを幼いホークは目の当たりにしている。ホークは父親の教会が貧困に喘ぐ移動労働者の宿となったり、また父親とともに、絶望した人々や病人を訪れたりして、困窮の何たるかを小さいときから経験した、と記している<sup>5)</sup>。

1939年、ホークが10歳のときに家族は南オーストラリア州から西オーストラリア州の州都パースに移住した。第二次大戦がすでに始まっていた1941年に、父親クレムはオーストラリア軍に従軍牧師とし雇われ1945年まで勤めた。幼少のときに父親の愛にはぐくまれて育ったホークには、父親と離れて暮らすことは苦痛であったとはいえ、それはホークに父親から独立するチャンスでもあった。

幼少から少年時代のホークは、年齢にしては小柄でしかも病弱で、周期的に病気になるという状況だった。学校もそのため欠席しがちだった。他の生徒からも小柄だということで、よく喧嘩の対象にされ、そのためか喧嘩には強かったとされる。15歳頃からの特別食事療法が効を奏して、ホークは丈夫になり、思春期には身体も大きくなり、他の友達とも対等につき合えるようになっただけでなく、持ち前の負けん気の強さで、スポーツで腕を上げるようになる。しかし当時はスポーツの方が先で、女性にはそれほどの興味を示さなかった。

**中・高等学校：** ホークの中・高校時代はパースにあるモダンスクール -Modern School- にかようことになる。両親がこの学校を選んだのは、同学校がエリート校で、西オーストラリア州の小学校で上位の成績をとった者しか入れないからということと、この学校は過去にすぐれた生徒が多かったことで有名だったからである。生徒の大半は貧しい家庭からで、この学校

でよい成績をあげれば、中流階級へ昇るための「パスポート」を得ることができるとされていた。ホークはクリケットなど運動選手としても活躍した。中・高校時代のホークは、宗教の影響もあって、小説は読まず、そのため読書だとか芸術にはあまり興味を示さなかった。しかし政治には興味を持つようになり、学生の中の討論などでは、才能の片鱗を窺わせていたとされる。ホークは労働党のシンパにもなっていた<sup>6)</sup>。ホークの政治への関心が高まった理由に、パースに在住していたホークの叔父 -父親クレムの弟- の影響がある。叔父は西オーストラリア州知事を勤めたこともある人物だった。

青年時代のホークの最大の魅力は、男女を問わず他の人々に親しまれる人柄であった。成人した彼は、友好的で、社会の習慣からはずれたような行動をとらず、真摯な性格で、宗教心の強い人間だった。青年時代の彼は飲酒、喫煙そして賭ごとには手をださず、家庭で教えられた社会的義務を果たすことを志し、社会の改善を目指し、道徳的にも完璧であろうと努力をした。元気に溢れ、頭脳の回転は素早く、そして女好きだった。しかし女の方は機知に富む彼の巧みなからかいに、どう対処していいかわからないといった状況だった。しかし学校ではいい成績を残したものの、ホークは彼の母親が望んだほど真剣にそして全力を学業に注いだというわけではなかった。その結果、ホークは高校を中レベルの席次で卒業している。モダン・スクールに在学中、ホークは数多くの将来豪州の各界を代表することになる学友との出会いをしている。そのなかには後の大蔵事務次官として活躍する John Stone との出会いもある。

**自覚・飲酒・女性好き：** 母親によって植え付けられた、いつかは「偉大な人間」 -政治的指導者- になるのだという自覚、そしてその自信はホークの成長とともに助成されていった。しかしその自信が、ホークの成長の過程でいろいろな試練に屈することでホークを苦しめることになる。その一例が飲酒である。飲酒はホークの人生の前半につきまとった弱点の一つで、もう一つはたわいのない「女性との戯れ」であった。母親エリーは婦人キリスト教禁酒同盟の熱心な一員として働いており、飲酒は死と腐敗に結びつくものだ信じて、ホークが禁酒を守るように毎日祈っていたといわれる<sup>7)</sup>。ホークは母親のために禁酒の誓いを守ることができなかったことは、彼にとって大きな苦痛であった、と後に告白しているように、熱狂的ともいえる禁酒主義者の母親と飲酒癖を持つ子の間に心痛める葛藤は長く続いた。

禁酒では勝てなかったものの、ホークの若い人生は、深い自覚と堅い自信に満ちていて、人生を試練との葛藤とみるようになり、なんとしてでも、そして母親の期待に応えるためにも、勝利を獲得しなければならないという意欲を、そしてそのためにはどうすればいいのかという冷静な判断力を、ホークは身に付けることになる。それがホークを後年に労使の紛争や社会改革への論戦での決着に奮起し、勝利への糸口をいかに見出すべきかと精力的に動くホークに再現されることになる。そして解決策を見出すときの喜びをホークは知り、社会的な問題や国家の危機といったような普通の人々が対面する問題よりはもっと高度な挑戦に挑み、それを解決することに満足感を求めるようになる。しかも彼の解決策には、彼独自の手法で、また彼のカリスマ的な性格もあって、社会の慣習にとらわれない類のものといったのが多い、とされる。幼少から青年期にかけて、ホークの「こうした優越を目指す戦いは、言葉使い、スポーツの腕前、攻撃的な競争などの点で、空威張りにも似た男らしさを示すことで、・・・女道楽を通して演じられた」と記されている<sup>8)</sup>。

## 2. 大学生時代 (1946年 - 1956年)

**労働党クラブ：** ホークは大学時代を、西オーストラリア大学 -The University of Western

Australia- で過すことになる。同大学は当時でも異色で、授業料は無料だったこと、そして自由闊達な雰囲気でした。ホークは法律の勉強を目指したが、それには特別の理由はなく、「何かしら役立つコース」と思われたに過ぎなかった<sup>9)</sup>。彼は当初は平均的な学生で、またスポーツマンであることで満足していた。彼はクリケットでは大学を代表する一軍の選手に選ばれている。政治的な活動にも興味を待ち、彼は大学の労働党クラブに入った。しかし彼は、「...間もなく幻滅を感じるようになる。それは労働党のクラブなんてものではなく、共産主義者のクラブといった方がよかった」<sup>10)</sup>、とされるもので、ホークは労働党クラブを去り、新たに別の労働党クラブを結成し、初代の議長になった。1930年代そして40年代と共産主義は国際的にも躍進を果たし、世界的にその影響力は増大し始めていた。こうした風潮のもと、ホークの政治的関心は高まっていた。ホークは在学中に豪州労働党の州支部の代議員にもなっている。

ホークが労働党の黨員となったのは、彼が17歳の大学生の時、両親をはじめ叔父といった身内に労働党の支持者がいたことが大きい。しかし若く感受性に富むホークが、労働党に惹かれ入党を決意したのは、当時のチフリー労働党政府の大規模な移民政策 -アジア人を含む大量の移民受け入れ- に感情的な高ぶりを感じ、それとともに同党の白豪主義に憤りを感じたのがきっかけであったとされる<sup>11)</sup>。それはキリスト教の信者として人類愛に燃えるホークが労働党の新たなインターナショナリズムに共感し、同党の伝統的な人種差別主義を彼自身の手で変えていこうという決意であった。こうして入党時からホークの党に対する態度は忠誠を尽くすというよりは党のあり方に挑戦していくというもので、党のイデオロギーに縛られることを拒むものであった。そしてホークは誰よりも労働党の真のあり方、あるいは党の原則がどうあるべきか、を知っていると確信していたとされる。ホークは首相に就任してからも彼自身の持つ個人としての価値観と党の綱領との整合性に頭を悩んでいる。そのいい例が公営機関の民営化、ウラニウムの開発やアボリジニーとの和解などである。

**バイク事故：** この大学時代に、ホークの人生観を変えるような事件が起こった。17歳のホークは両親の家からバスで通学していたが、広大な政府の保有地 -キングス公園- を迂回するために30分以上も通学に余分な時間がかかっていた。しかし車で公園を横断すれば通学の時間を10分前後も節約できるので、ホークは両親の反対を押し切ってオートバイを買うことになった。しかしそれは彼を生死にさまよう交通事故にまきこむことになった。彼の兄、ニールは、すでにホークが事故を起こしたと同じ年齢で、病気により死去していた。ホークが命をとりとめ回復したことは、彼に自分は神によって選ばれた道具だということを再確信させることとなった。「...あの事故がいかに重大だったか、いくら言っても言い過ぎでない。私の人生にとって明白な転換点であった」<sup>12)</sup>、と記されているように、「いままで学校を真剣に考えてこなかった。大学もまじめに考えてこなかった。私は病院のベッドに横たわりながら、自分の能力を最大限に発揮するような人生を生きよう。自分の限界いっぱい押し進めようと決意した」<sup>13)</sup>。この世界のために尽くすという使命感こそ、ホークの母親が息子に植え付けようとしたものであった。ホークは死を免れて後特別なエネルギーが身についたとを感じるようになった。18歳から24歳のホークを振り返って、彼の友人の一人は、「ホークは・・・誰をも魅了した。(彼が) 首相になるのはわかりきった結論だった。私は本気でそう考えた。・・・彼が他人にものを信じさせるやり口は魔術ですらあった。他人を巧みに操る技術、それを彼は持っていた」と語っている<sup>14)</sup>。後に首相になり、「カリスマのある首相」ともてはやされるそのカリスマをホークはこの時期すでに身につけていたわけである。

**学生組合の委員長：** ホークは21歳のときに法律の学位を二番という好成績で取得したが、

さらに経済学を専攻することで、法律の学位に加えて、もう一つの学位を取ることを決意した。そして経済学の学位を目指しながら、学生組合の委員長の地位につくこと、権威のあるそして英国留学への道となるローズ奨学金の西オーストラリア州の受給資格者になることの二つに向けて動き始めた。

この二つの目標をホークはのちに達成することになるのであるが、先ず学生組合委員長としての活躍では、学生の代表者として大学そして学生のために、ホークは彼の力量を存分に発揮したといえよう。当時の学長はホークについて次のように述べている。「ホークは申し分なく最上格の人間だった。学長としての私から見ればまず完璧な委員長だった。紳士的、協力的で魅力があり、歴代の委員長の中では、責任感の強い点で際だっていた。彼は生まれつきの指導者だった。・・・ホークは革新的で、会合の司会者として卓越していた」<sup>15)</sup>。

ホークは大学の学生の代表という立場にいたために、それまで未知だった国内外の上流階層の人々 -例えば州総督や学長夫妻- と知り合う機会を得、また彼の社交性にたけた性格もあって、若年にもかかわらず、こうした上層階級の人々と親しく交際するようになる。しかしこうした人との交際は、ホークが母親によって厳しくとめられていた飲酒を始める機会となってしまった。そしてそれ以後幾度となくホークの人生にさまざまな影響を及ぼすことになる飲酒の習慣が身に付くことになる。ホークは母親に飲酒を始めたことを告白しただけでなく、止めることができないと告げざるを得なかった。ホークは後に自分が母親にどれだけの苦痛を与えたかで深く悔やんでいる。またホークの学生時代のエピソードの一つに、学内のビールの早飲み競争で優勝し、そのビール早飲みスピードでは、世界一を記録してギネス・ブックに記載されたということがある。

**ヘーゼルとの出会い：** こうした酒とそれに伴う若者のドンチャン騒ぎの大学時代ではあったが、ホークの伴侶となるヘーゼル・マスターマン -Hazel Masterman- と巡り会う機会も存在した。ヘーゼルとは同じ教会で知り合い、ホークが19歳のときの1949年に婚約することになる。しかし正式に結婚式をあげるまでの六年間は両親の同意のもとヘーゼルと同棲している。ヘーゼルは金髪、青い目をした美人で、彼女の父は会計士で保守主義者であった。彼女は速記者として働き、教会のピアニストを勤め、ホークが会長をしていた会衆派教会の青年会の書記をしていた。

**アジアからの留学生：** 大学在学中ホークは、学生同士のつき合いで、入学してきた第二次大戦からの帰還兵とアジアからの留学生との交際が彼の視野を広めたことをあげている。ホークはアジアからの留学生が、留学先の豪州で親しい友達もなく、望郷の念にかられ寂しくしているのを目にして、彼らの歓迎に尽くし、アジアからの苦学生を家に招いて、家族の一員として受け入れたりした。ホークは留学生のために大学に国際クラブ -international club- をつくることを企画した。インターナショナル・ハウスの設立の構想、設計から資金の募集までホークは先頭になって尽くしたが、完成に至らなかった。設立には人種的な問題も絡んではいたが、ホークの楽観主義が災いしたことも確かだとされる<sup>16)</sup>。クラブの設立は夢と消えたが、これはホークが企画したものが完成を見なかった最初のものとなった。ホークは当時の労働党政府の大量のアジアからの移民の受け入れ政策に感銘し、アジアを経済的そして人道的な面からの救済を心に念じるようになっていた<sup>17)</sup>。

この時期は、また若くて感受性に富むホークがキリスト教だけでなく仏教さらにヒンドウ教を含んだ宗教全般、そして神について真剣に考え、そして友達と語り合った時で、ホークの精神面での大きな成長期でもあった。なかでも神学論争など知的な交流で知られるニューマン

クラブ -Newman Club- に属したカトリックの先輩達との対話で、彼は多くのことを学んだ。プロテスタントの牧師の家で育ち、教育を受けたホークは深い宗教心を幼少の時から身につけていたが、大学に入ってホークはキリスト教以外の宗教の教義を知り、またキリスト教でも特にローマ・カトリックの教義を知る機会を得たわけである。しかし彼に決定的ともいえる宗教的な衝撃はインドを訪問したときに起こった。

**インドでの体験：** ホークは1952年にインドで開かれたキリスト教青年会の世界会議に彼の属する教会の代表として出席するチャンスを与えられた。その時ホークは21歳であった。そしてその旅行でホークはインドの貧困、特に貧富の差、そしてキリスト教徒である上層階級の社会的弱者に対する無関心、さらにインドの共産主義者の活動を目の当たりにすることになる。幼少から両親の影響もあって、人を助けることを人間の当然の義務と自覚しているホークには、インド社会の貧困に対して深い道義的な怒りを覚えた。

彼自身の回想録に、読むものの心を強く動かすホークのインド滞在中で最も印象深く、そして彼の人生に少なからぬ影響を与えたエピソードが語られている。それはクリスマスイブの日、司教の公邸での豪華なクリスマス・パーティーでの疲れを癒すために、日没後に涼しさを求めて、近所の村に散策に出かけたときのことであった。そこで彼の目にとまったのは、暖をとるために小さなボロを身体にかけて、道ばたに横たわっていた幼児と少女の姉弟であった。見るに堪えぬ子どもたちの姿を目の当たりにしてホークは、宿舎にとって返し、自分のジャンパーを持って子供達のところに戻り、ジャンパーを手渡した。姉は小さな弟にそれを着せた。ホークのこの行為は少女と幼児には、彼らが生まれて初めて経験した素晴らしいことのようにだった、とホークは記している<sup>18)</sup>。彼の貧困の救済への熱意はこうして芽生えた。インドでの体験は彼の生活の転回点になる。帰国してホークは教会でのインド訪問の報告会で彼の体験を語った。彼の話は教会のすべての人を感動させた。話しているときにホークは、「考えもしなかった能力を自分は内に感じた。話しているのは私でなく、誰か他の人のようであった」と記している<sup>19)</sup>。ホークの父親もインドから帰ってきた息子のホークについて大きな変化が起こっているのを感じた、と語っている。「私はホークが感情に動かされたのを二回しか見ていない。最初はインド訪問のときであり、二度目はイスラエル戦争(ヨム・キップル)のあとである」と記されている<sup>20)</sup>。しかしその後彼の教会への関心は薄れていき、後に彼は自分を「不可知論者」だということになる。しかしこの変心はインドでホークが見たキリスト教会全体の社会救済に対する無力・無関心への反発によるものであるが、教会そして宗教に対する猜疑心がホークをより実践的にし、そしてホークを政治への道へと追いやることになる。

**オックスフォード大学での生活：** 帰国したホークは、豪州の大学の優秀な卒業生なら誰でもが憧れる英国への留学を目指してローズ奨学金の獲得に乗り出す。ホークは以前に一度選に漏れたが、今回は新たな決意のもと再度奨学金に挑戦した。そして首尾良く1953年度の西オーストラリア州のローズ奨学生に選出され、ホークは英国の名門オックスフォード大学で2年過ごすこととなる。世界の名門校とはいえ、ホークが最初に住んだ学生寮は古代の遺物のような建物で、学生は不便さに耐えることを求められた。オックスフォード大に来た当初、ホークは孤独感に襲われ、ホームシックにかかった。ホークは婚約していたヘーゼルに仕事をやめて、英国に来ることを求めた。ヘーゼルの到来は彼のオックスフォード大での生活を「わが生涯の最良の日」に変えることになる。ホークの大学での勉強態度について、大学の彼の学監は次のように述べている。「夏、彼は酒を飲み過ぎ、女と遊び過ぎ、クリケット競技をやり過ぎていた。こんな調子では彼はひどいことになるぞと思った。冬が来ると彼は女をやめ、激しく勉強

した。過労で病気になるのではないかと思ったほどだった。しかし夏が来ると、彼は図書館のことは忘れ、女とビールに戻った」<sup>21)</sup>。

ホークはオックスフォード大学の図書館に豪州の独特の賃金決定方式についての豊富な資料があることを知り、「オーストラリアの仲裁制度 - 賃金はいかに決定されたか」について卒業論文を書くことを決意した。それはそれまで誰にも研究されていなかった分野であったからでもある。1955年12月にホークは「基準賃金の概念の発展に関するオーストラリア連邦調停仲裁裁判所の役割の評価」と題した学位論文を書き上げた。ホークは26歳になっていた。この論文は豪州の労使関係での新境地を開いたものとされ、約25年間労使関係の歴史を学ぶものにとっての必読書になった<sup>22)</sup>。ホークの学位論文の最後の節には次の文章がある。「オーストラリアが国家になったとき、(賃金) 制定制度の設立という大胆な実験を行った。もし実験が自己完成に不十分だとなれば、オーストラリアはこの事実を認め、設立と同様の大胆さで、この制度を改善していくはずである」と<sup>23)</sup>。後年ホークが労働党政権下で政府・労組・経営者の三者によるアコード(合意)を導入して賃金決定制度に取り組むことになるが、そのことが奇しくもここに記されている。

ある歴史家はオックスフォードでのホークの経験について、次のように記している。「ホークはオックスフォードを去るにあたり、入学前と比べて自分はオーストラリア人だとの確信を一段と深めた唯一の人だった。オックスフォードはホークに対してケンブリッジが10年前にリー・クアン・ユー - シンガポールの前首相 - に与えたのと同じ効果を及ぼした。二人とも大学では彼らより優れた者はいないこと、二人とも運命はともに出身の国にあることを知っていた」<sup>24)</sup>。

オックスフォード大学での二年間の生活を終えて、ホークはヘーゼルとともに1956年に帰国した。そして西オーストラリア州のパスに住むことにし、そこで結婚式を挙げた。帰国後の西オーストラリア州の生活で、労働党の政治家で同州の首相としてまで活躍したホークの叔父と親しく交際した。叔父との会話でホークが連邦議会へ出馬する可能性も話し合われていた。叔父の影響は、のちの政治家としてのホークに大きな印象を与えたことは疑いはないであろう。

**キャンベラでの学究生活：** ホークは首都キャンベラにあるオーストラリア国立大学 -The Australian National University- から研究者への奨学金を獲得して、基準賃金に関する彼の研究をさらに深め、博士論文を書くことを決意した。キャンベラでの生活を始めたホークとヘーゼルの間に1957年には最初の子 - 女兒 - が誕生している。ANUでの彼の生活は彼らしいもので、クリケット、酒、いたずら、そして夜を徹しての議論、さらには有名人との交際が生活の中心を占めていた。こうしたことを通して、彼は人格的にも成熟していった。

ホークはANUに入ってからしばらく、学問的生活の道に進むべきかどうかで悩むときもあった。そして法律を勉強することで、社会に役立ちたいという彼の本能にも近いような願望が、法律の一分野である賃金仲裁制度を研究することで適えられるものではない、ということに気づくようになっていた。彼はけっして象牙の塔に籠もるような理論家ではなく、現実的な人間であった。

### 3. 1940年代から1950年代にかけての豪州の政治・社会の状況

ホークが中学・高校そして大学と成長していったときの豪州の政治・社会情勢はどんなものだったのだろうか。ホークが生まれたのは1929年12月であるから、1930年代の世界大恐慌の端緒となった米国のウォールストリートの株価大暴落の一ヶ月後である。この大恐慌の余波は豪州も襲い、失業率は急騰した。前述したように、職を失った人々がホークの父親の教会に

足を運び、食事などの施しを受けていたのを幼少のホークは記憶している。ホークの母親はこうした不幸の人々のための慈善事業に熱心に励んでいた。

ホークが自我に目覚め始めようという10歳に達する数ヶ月前の1939年9月に第二次世界大戦が欧州で勃発している。この大戦はホークが敬愛する労働党の歴代の名宰相と呼ばれる J. カーティン -John Curtin- がその名声を遂げた時であり、また日本が切迫した「北からの脅威」として豪州人に映った時でもある。日本軍が真珠湾とシンガポールに攻撃を加えたのが1941年12月であった。太平洋戦争の幕開けで豪州国民は初めて国の存続をかけた未曾有の脅威に晒されることになる。豪州国民はこの大戦をファシズムから民主主義を守る戦いであると位置づけた。しかし豪州の防衛といえば、即戦力となる豪州の軍隊は中東の戦いに従事していたために、シンガポールの英国艦隊とその地域の英国の防衛力に頼っているという状況であった。しかしその英国艦隊は日本軍によって撃沈されてしまう。1942年には日本空軍は豪州の北端の町ダービンに爆撃を加えた。こうした状況から、豪州政府は英国政府の反対を押し切って、豪州軍を中東から撤兵させて豪州に戻した。そしてさらに英国の援助を仰ぐという豪州の伝統的な態度を捨て、豪州の存続には米国の軍事力に頼らざるを得ないと判断し、米国に助力を求めた。

**社会主義の躍進と共産主義の台頭：** 第二次世界大戦の終了とともに、米ソ間の対立は急激に悪化し、いわゆる冷戦と呼ばれる期間に突入することになる。1950年代から1960年代にかけて国際的に展開された社会主義の躍進と共産主義の台頭で、豪州の国内でも共産党や極左派の動きが活発になり、労働運動も急激派の勢力が主導権を握るようになる。1950年代末の豪州の労働運動は混乱の極みにあった。こうした動きに対して保守派の反発は高まり、右と左との抗争が繰り返され、社会全体に緊張が高まっていった。

当時の豪州の「北からの脅威」は、「赤禍」-共産主義の南下-であった。1947年にはそれまでオランダの植民地であったインドネシアで、オランダから独立を目指したインドネシア国民の蜂起があり、この反植民地主義運動が反資本主義さらには共産主義運動に移行する懸念があった。さらに1949年には中国人民共和国(中共)の設立が宣言され、中共はソ連と親密な友好関係を、そしてインドネシア政府とは外交関係を結んでいた。加えて、1950年から53年にかけて朝鮮戦争が起こり、また1954年にはベトナムが南北に分かれたものの、1959年には北ベトナム共産党は統一ベトナムの達成を呼びかけて、反共産主義派との紛争が始まっていた。豪州にとって南ベトナム、タイ、マレー半島そしてインドネシアとは距離的にも近いということもあり、こうした国への共産主義の拡大は大きな脅威であり、事実、当時こうした東南アジアの国々が共産主義の勢力のもと、ドミノ倒しになるのではないかとの恐れが深まっていた。

大戦後の豪州の政局で特に注目し値する一つが、豪州の社会の発展に大きな影響を及ぼすことになる大規模な移民受け入れの実施であった。第二次大戦後の欧州の経済的な苦境を和らげるという意向から数百万人にのぼる欧州からの移民が許されたが、その半数近くが英国系以外の欧州民族ということである。この移民政策ほど豪州社会の性格を大きく変えたものはないとされる。ホーク自身もこの豪州政府の決断 -豪州の人口は英国系のみによるものではない- に大きな感動を受けたことを記している<sup>25)</sup>。

#### 4. 豪州労働組合評議会(ACTU)の研究員・代弁者の時代 (1957年 - 1969年)

ホークがキャンベラの学窓で豪州の賃金裁定制度 -その制度の機能の理論化- の研究を深めようとしているときに、ホークは賃金裁定に関する知識をかわれて、豪州の労働組合運動の全国センターであるオーストラリア労働組合評議会 -The Australian Council of Trade Unions : A



CTU- から、ACTU の研究員として就職するよう誘いを受けた。ホークはそれを受諾し、ACTU での生活を始めることになる。ホークは 28 歳だった。ホークが ACTU から注目された背景には当時豪州の賃金裁定制度自体の存続が問われるような事態が発展していたからである。ACTU での就職はホークの将来に関わる大きな挑戦となった。

**オーストラリア労働組合評議会：** ACTU は豪州の労働組合運動全般を指導し、豪州の独自の賃金調停・仲裁制度のもと、ストライキや賃金・労働条件の向上などの全国レベルでの団体交渉で雇用者側と相対するために、組合運動の全国代表の役割を担う。ACTU は 1927 年に設立されている。当時の ACTU は政治的には労働党の選挙基盤であり、政治-労働党- とのかかわりは緊密であった。ホークの研究員としての仕事は、豪州独自の賃金裁定制度のもとの賃金裁判の法廷で ACTU の立場を歴史的、法的の面から弁護するための資料を準備するというものであった。ホークは「私は基準賃金の制度について、誰よりもよく知っていた。私はその仕事をするに充分過ぎる勉強をしてあった」と自信を示している<sup>26)</sup>。ホークは大学で学んだ経済学の知識を賃金の設定に持ち込むことになる。ホークの就職はそれまで労組が無学を誇りとし、「知的」「学問がある」を「馬鹿」「軟弱な」と同義語としていた労組の風潮を変えることになった。

**ホークと労働組合運動：** 右と左に分かれて紛争が絶えない ACTU の中で生きていくには、敵であろうと対話を絶やさないとすることが必要であろう。人怖じせず話上手なホークは、こうした雰囲気飲まれることなく、多くの人と交わり、友好関係を築き上げていった。ホークは労働者の現状を知るべく、工場・職場へと顔を出した。労働者との交際を通して、ホークは年輩の労働者の中には、若いときに家庭の貧困から大学教育を受けられなかったために、卓越した才能があるにもかかわらず、生涯を工場の中でのみに過ごす者がいることを観察している。もし自分が 1929 年末からの世界大恐慌のときに青年期をおくったら、彼らと同じように生涯を労働者として過ごすことになったかもしれないという運命の厳しさを痛感している<sup>27)</sup>。

大学教育さえ受けられれば、医者、弁護士、あるいは公認会計士になれたであろうこうした労働者は、今は貪欲な資本家の過酷な扱いから労働者の生活の場を守ろうと真摯な努力を惜しまない共産主義者であったり、同調者であった。しかし彼らとて心の温かい、そして人間味あふれる者たちであることをホークは知るようになる。ホークはこうした労働者との交わりから労働組合運動 -Labour Movement- の何たるかを实地に学んでいく。

ホークが交わった労働者の中には、ホークのような実際に労働者として手を汚すといった経験もなく、ただ賃金裁定の知識があるというだけで ACTU に雇われた若者が、本当に労働者の立場を理解でき、賃金裁定の法廷で労働者の立場を代弁できるのかと疑っていた者も少なくはなかった。その疑惑をホークは賃金裁定という法廷の場で労働者の立場を巧みに代弁することで払拭していく。ホークにこの払拭する機会が訪れたのは、ホークが ACTU に就職して二年後の 1959 年の賃金裁定の時であるが、その前提となる 1950 年の賃金裁定が物議を醸していた。

**1950 年の賃金裁定：** この年の裁定は豪州独自の調停・仲裁制度の一つの欠陥を如実に示すものであった。賃金裁定制度の一つの特徴でありまた欠陥は、裁定は社会に公平をもたらすためになされても、結果は必ず社会のあるグループ -例えば経営者- が「得」をし、他のグループ -労働者- は「損」を被るという、いわゆるゼロサム・ゲーム式ものであり、双方が「得」をするということがまずない。さらにその配分を「公平性」という基準で判断する判事達が、政治家によって任命される以上、彼らの判断が当時の政治状況にかなり影響されているということである。そのため「不公平」が正当化されることで、社会の安定が脅かされるという問

題がある。1950年と1953年の賃金裁定がそのいい例であった。

1950年、急進的な判事 - 「赤い判事」とも呼ばれた - のもとでの賃金裁定で、それまで豪州の労働者は必要以上に貧困を強いられてきたとして、基準賃金の一ポンドの引き上げ - 当時としては法外な裁定 - が決定された。そしてその仲裁に賛成する組合に対して、それに反対する経営者側と経営者側の主張に同調する政府とが激しくぶつかり合うことになった。仲裁に携わる判事達の中にもこの裁定に反対するものがいて、この賃上げはインフレを招き国全体に損害をもたらすとし、こうした裁定を出す豪州の賃金裁定制度自体に問題があるとして、制度を改革しようとする動きが起こったほどであった。とにかく1950年の賃金裁定を不満とする経営者側は、この裁定を覆そうと試みてきた。それに成功を収めたのが1953年の賃金裁定である。

**1953年の賃金裁定：** 1950年の賃金裁定で賃金が必要以上に引き上げられたとして、1953年の賃金裁定では、調停・仲裁裁判所は経営者側に立ち1950年の裁定を撤回することを決めた。そして裁判ではそれまで採用されてきた基準賃金の年四回の自動的スライド制を撤廃し、以後賃金は、実質賃金でなく名目賃金で、しかも経営者側に「支払い能力」があるときのみ引き上げられるとするものであった。しかしその「支払い能力」があるかどうかの決定は、調停・仲裁裁判所の判事達の判断に任せられるわけであるが、判事達が「支払い能力」に関する経済・経営の専門の知識を持っているというわけではない。そのため労働組合が1953年の賃金裁定に激怒したのはいうまでもない。しかし組合の反対にもかかわらず、1953年の裁定は継続され、加えて、1956年には政府は、それまでの調停・仲裁裁判所を産業裁判所労働法廷と仲裁調停委員会の二つに分割し、賃金裁定は後者で扱われることになった。労組はその立場上窮地に陥っていた。

**ホークの登場：** ACTU は1953年の賃金裁定を不満として1956年、57年、そして58年と三回にわたって1953年の賃金裁定を覆そうと図ったが失敗していた。イデオロギー的にも資本主義対共産主義に分かれて激しい対立が続くなか、ACTU は1950年代初頭からの経営者側からの労働市場への一連の「革命的」ともいえる敵対的な動きに対処すべく、そして特に1953年の賃金裁定の撤回をはじめとする労組の戦略を討議するために、1956年に特別総会を開いた。こうして当時のACTUの最大の課題は、1953年の賃金裁定を覆すことであり、そのために組合側としては、最高の権威と説得力を備えた人物が必要だったのである。しかしそこに登場してきたのが僅か28歳という若者だった。

ACTU はホークの基準賃金に関する意見を参考にすべく、ホークに1956年の特別総会に出席することを許した。そしてさらに翌年の1957年の基準賃金決定の調停・仲裁委員会での審議にACTUを代表して出席するチャンスをホークに与えた。ホークはACTUの総会への出席、そして仲裁・調停裁判の審議の見学などから、労働組合運動が窮地に追い込まれるのを目の当たりにして、労働運動のために働くことを決意し、ACTUでの仕事が彼の運命と確信するようになっていた。しかし西オーストラリア大、オックスフォード大、そしてANUと三つの大学で教育を受けたとはいえ、労働者としての経験のないホークが労働者階級を代表する能力があるか、はもとより1953年の賃金裁定を覆すなどは誰もホークに期待はしていなかった。しかしホークは当時「私がこの国の誰よりも基準賃金についてよく知っていることがACTUの執行部に明らかになった」のだ、と記し、自信の程をみせている<sup>28)</sup>。

**1959年の賃金裁定：** ホークは1953年の調停・仲裁裁判所の裁定は公平性を欠き、労働者に不当な負担を強いているとして激しい憤りを感じていた。この裁定を撤回すべく、労働者の代弁者としてのホークは強い熱意と情熱を燃やして、1959年の賃金裁定に臨んだ。ホークの

試金石の最初の裁判での様子は「神経質そうに身体を静止させることなく……足踏みし、靴の踵をならし、身ぶりを交え、もどかしそうに眼をくるくる回し、眉を紐がついているように上下させていた。身体で表現する言葉は一分間に220語という速さであった。しかも道を隔てたところでも聞こえるという大声でなされた」と記されている<sup>29)</sup>。このホークの弁論のスタイルは、後にやや洗練されたものの、ホークのトレード・マークとなって定着する。当時のホークは野心に満ち、自信に溢れていた。しかし裁判で彼が高く評価されたのは、ただ彼の辛辣な弁論の力量だけではなかった。彼の発言には経済学の理論の裏付けがあったからである。

1959年の賃金裁定で、ホークは当時としては最新の経済学の理論を用いて、まず基準賃金の決定には、あいまいな「支払い能力」という言葉の代わりに、生産性という言葉を使うべきだとし、賃金は生産性の向上と価格の上昇に応じて引き上げられるべきだと、主張した。特にホークが経済学的にも不合理だとして追求したのが、経営者側が主張する賃金は「支払い能力」、正しくは「生産性」-それがどう判事達によって計られようと-のみによって決められるという点である。ホークは統計を駆使して、1953年以来生産性は10%上昇しているから、実質賃金は10%引き上げられるべきところ、実際には5%下がっていると指摘した。ホークは判事達に今までは賃金が物価上昇に遅れないことのみで腐心してきたが、経済学の議論から賃金は、生産性の上昇にも遅れてはならないということを理解する必要があると説明した<sup>30)</sup>。彼の裁判での主張は、1953年の裁定を無効として、年四回の賃金の自動的調整を再導入し、基準賃金は生産性の向上に応じて引き上げる、とするものであった。

ホークの主張は1959年の最終の裁定で認められた。自動的調整の再導入は認められなかったものの、再導入されたとき以上の賃上げを組合側は裁判で勝ち取ることができた。ホークのこの「勝利」は労働組合運動には驚異に値するものだった。彼の評価は高まり、労組の世界ではホークはまさに一躍ヒーローになった。この年の賃金裁定での勝利以来、ホークはテレビ出演を依頼されたり、新聞のインタビューを求められるようになった。ホークは労組と労働者とは彼のアイデンティティー-存在感-を発見したと記している<sup>31)</sup>。しかし経営者側からは、ホークは「ミスター・インフレーション」と呼ばれ、物価高はホークの責任だと揶揄された。

**ホークの仕事ぶり：** ホークの仕事は法廷で法律と経済の専門家として、組合側の主張を陳述することだった。法廷で経済論を展開するということは以前にはなかったことである。当時の労組の幹部は次のように述べている。「(ホークは)、私が知っている限り、全国労働組合のなかで大学教育を受けている唯一の人間だった。彼は労働組合運動のなかに経済について議論を持ち込むことを始めた。……この時こそ労働組合の考えに変化が起こり始めた時だった。彼はいつも勝ったわけではない。しかし論理的な主張のやり方を軌道に乗せた。粗野な断言の時代は去った」<sup>32)</sup>。ホークは若年にもかかわらず、仲裁裁判の判事達の経済に対する知識を疑い始めていた。そしてホークは各判事が「国家経済の重要な問題を決めることができるのはいかなる資格にもとづく考えなのか」と、迫るときもあった、と記されている<sup>33)</sup>。

当時のACTUには資料を揃えた図書室といったようなものもなければ、建物も設備も貧弱だった。夏は暑くなるので、ホークは午前4時には家を出て、法廷での弁明前の朝の5時間を準備に費やした。しかも労組の代弁者はホーク一人であったために、その準備も用意周到を極めた。それは法廷では判事団、経営者側代表、そして政府からの労組に対する質疑には一人で労組の立場を代表して対応しなければならなかったからである。しかしホークは弁論の術に長けていた。彼は数行のメモで丸一日しゃべり続けることさえできた。ホークはこの時期に、法廷で12日間も続けて意見の陳述をしたこともあった。強い意志の力と主義への固い信念がホー

クを駆り立てていた。そしてその熱意は判事達を動かし、彼の主張が判事団に受け入れられたという事態も度々起こったといわれる。

**1960年の賃金裁定：** 輝かしい「勝利」を得た1959年の翌年の1960年の賃金裁定でのホークは、労組の代弁者として厳しい立場に立たされることになった。当時のメンジース首相下の保守政府は経営者側に同調していたため、当然1959年の賃金裁定を快く思っていなかった。そのため1960年の調停・仲裁委員会では政府が経営者側に加担して、組合側が求めていた基準賃金の大幅引き上げは認められず、ホークは苦杯をなめさせられた。この頃からホークは委員会での裁定への不満から、裁定制度それ自体に不信感を抱くようになる。そしてそれがホークを調停・仲裁制度の廃止を主張するACTUの左派に引き寄せる要因になった。こうしてホークも当時の「右」か「左」かの色分けからは逃げられず、「左」というレッテルが似合うようになってくる。

**ホークは左派・共産主義者か：** ホークの名が広まるとともに、労働組合運動の内部で、右派はホークに警戒心を示すようになる一方、左派はホークを受け容れ、ホークは左派の人間だという見方が強くなっていった。当時の労働組合運動の右派は反共産主義的で、全国キリスト教協議会、民主労働党から労働党の中立派に至るまでの広い影響力を持っていた。そして残りが左派で共産主義的なイデオロギーに同調していた。ホークが共産主義者であるとの噂は、労働党内そしてACTU内右派の策略もあって広まっていた。賃上げによって資本主義体制を破産させることを目論んでいるというのが、その根拠であった。この噂はまたホークの主張に反対する経営者側から流されたともいえようが、ホークの「宗教的な熱意」ともいわれるほどの性格の強さにも一因があろう。その「宗教的な熱意」はイデオロギーにこだわるからとみられるからである。また時期的にも、ホークはこの頃から幼少の時から信心深さを捨てて、不可知論者になったとされる<sup>34)</sup>。

**1961年の賃金裁定：** 1961年の賃金裁定でホークは、組合側の意見・立場を理解してもらうべく、開会から3日間もぶっ通しで弁舌を振るった。さらに同裁判では12日間の長きにわたる答弁をしている<sup>35)</sup>。そして熱意が伝わったのか、裁判ではホークの組合側の主張が認められて、賃上げに加えて、年一回は生活費の上昇に応じて、さらに三年に一回は生産性の上昇に応じて、賃金の調整が行われることが決定された。この勝利でホークはますます労働組合運動の英雄ともてはやされるようになった。ホークはACTUのスポークスマンとして国民に紹介され、ホークの闘争的な見解や過激的ともいえる弁舌は、労働党左派そして労働組合運動の左派のエゴをくすぐって余りあるものだった。こうした背景のもと、豪州の労働界そして政界へホークが足を大きく踏み入れようとしているときに、ホークの家族そして彼自身は不運に見舞われるという事態が起こった。

## 5. ホークの私生活と公生活

ホークの調停・仲裁委員会でのACTUの代弁者としての成功は、しかし彼自身の家庭生活の犠牲を伴うものであった。1959年には二番目の子供 -息子- が生まれているが、家事と育児はほぼ完全に妻ヘーゼルに任せられていた。仲裁委員会での仕事は長時間を必要とした上に、ホークは彼の職場である組合では「インテリ」のラベルをぬぐい去るためにも、そして組合の活動家であるということを示すためにも、他の組合員ともビールを交えた交際が必要であった。そして彼は心から組合員とつき合うのを喜んだ。そしてホークはあらゆる階層の人々とつき合うことができた。ホークは労組の連中だけでなく、弁護士、判事あるいは議員とパブ（酒場）

で、ビールを交えて議論するのが常だった。「パブでの接触から膨大な友情の網を広げることができた。……(彼は)よく飲んだ。しかし当時の彼はいい飲み方をした。どんなに飲んでも、精気あふれる議論ができたし、論理的に話すことができた。そして彼は、割合安全に車を運転することができた」と記されている<sup>36)</sup>。ホークの飲酒の特異なことは、二日酔いをしないことだった。

1960年には三番目の子 -娘- そして1963年には四番目の子 -息子- が生まれた。しかし四番目は早産で生後数日で死去した。こうした折り、ホーク自身は突然に発作に見舞われ、彼の身体はマヒした状態に陥った。彼はアルコール中毒を罹っていたのである。子を失ったうえに、彼自身の健康問題を抱えるという不運が降りかかり、悲しみの時期に入ったときに、ホークには新たな道が開けてきていた。ホークの政界への誘いである。

**連邦議員へ立候補：** 当時の豪州の政治はメンジース首相のもとの保守政権下にあり、豪州経済は1961年以後好調で失業率は無視できるほど低下していた。他方、野党の労働党は分裂し、分派は民主労働党を結成していて、労働党は単独では与党に挑戦するだけの勢力を保持していなかった。こうした政治状況を利用して、1963年10月にメンジース保守政権は総選挙に踏み切った。

悲嘆にくれるホーク一家には、ホークが連邦選挙に出馬するということが好い転機であった。赤児の死そしてアルコール中毒の禍を頭から払拭するためにも、「君は全国に知られているし、コリオ(選挙区)なら勝てる。君は全労働運動のためにそうする義務がある。君は素晴らしい弁護士で、誰も君の真似はできない」<sup>37)</sup>、という誘いは、当時のホークには時を得たものであった。ホークは議会人としての道を進むことを決意し、ACTUを辞任した。ホークは労働党の候補者として公認された。

ホークの当初の選挙運動は熱狂的ともいえる支持を選挙民から受けた。ホークの選挙運動は「労使関係の分野では豪州で一番経験をもっている者」を掲げて闘われた。しかし当時の世界情勢は緊急の度合いを高めていた。インドネシアとマレーシアとの関係に豪州が干渉したとして、インドネシアのスカルノ政権は豪州に対して不穏な動きをみせていた。インドネシア軍の豪州への侵攻への恐怖が現実化され始めていたのである。こうして1963年の選挙は、選挙運動が進展するとともに、豪州国民には労使関係より防衛・外交が当時の重大課題と見なされるようになっていた。加えて、ホークは彼が立候補した選挙区(コリオ)の「地元の出身者」でないことも彼の選挙運動を不利に導いた。さらにホーク側にとって致命的ともいえる事件が突発した。ケネディー米大統領の暗殺で、そしてそれに先だって起こった南ベトナムのジエム大統領の暗殺である。こうした国際的な不安な事態のもとでは、国民は政権の交代より現状維持を国家の安定のために求めるのが常である。ホークの得票は相手の保守党の候補者を上回っていたが、豪州の選挙制度の優先順位 -primary preference- の投票の結果は、対立候補者に多数の票が振り分けられたために、ホークは選挙に敗れ、連邦議員の座を得ることができなかった。落選したホークは再びACTUに戻り、調停・仲裁委員会で労組の代弁者として活躍を続けることになる。

## あとがき

本稿では、ホークの人生の最初の部分、1929年の生い立ちから1960年までの期間、を記述するスペースしか持てなかった。しかしそこに現れたホークの人物像は、中間階級に生まれ、「将来必ず人類に役立つ人物になる」という強い信念を子に持つ、宗教心の厚い母親に

応えようというホークの姿だった。それは若いときから周囲からは、将来政治家それも首相にと期待されるほどの機知と意志力に恵まれたホークだった。自分の信念に向かう強い決断力と意欲は誤解を招き、挫折することもあった。しかし労働者としての経験の全くなかったホークが、労働組合のために人生を捧げてもよし、とした背景には、幼いときから彼に根付いたキリスト教の影響があったのではないだろうか。

註

1. デルピュージェ B. 小林 宏訳： ホークとその時代 上 勁草書房 1982 6頁
2. 同上 11頁
3. 同上 22頁
4. 同上 1頁
5. Hawke R : The Hawke Memours, William Heinemann Australia, 1994 4頁
6. デルピュージェ(1) 31頁
7. Hawke(5) 167頁
8. デルピュージェ(1) 31頁
9. 同上 35頁
10. 同上 38頁
11. Anson S : Hawke, An Emotional Life, McPhee Gribble, 1991 63頁
12. デルピュージェ(1) 40頁
13. Hawke(5) 14頁
14. デルピュージェ(1) 42頁
15. 同上 44頁
16. 同上 47頁
17. Hawke(5) 18頁
18. 同上 22頁
19. デルピュージェ(1) 62頁
20. 同上 60頁
21. 同上 77頁
22. 同上 78頁
23. 同上 78頁
24. 同上 70頁
25. Hawke(5) 25頁
26. デルピュージェ(1) 95頁
27. Hawke(5) 36頁
28. 同上 37頁
29. デルピュージェ(1) 99頁
30. 同上 106頁
31. Hawke(5) 40頁
32. デルピュージェ(1) 108頁
33. 同上 98頁
34. 同上 108頁
35. 同上 98頁
36. 同上 122頁
37. 同上130頁